女性会計士20人　人生の中間決算書

女性会計士20人の人生の中間決算書

～おせっかいな先輩より。キャリア・家庭・これから～

日本公認会計士協会　近畿会

日本公認会計士協会　近畿会

女性会計士20人　人生の中間決算書

はじめに

公認会計士制度が発足してから、平成20年（２００８）で60年になりました。60年という長い年月の中で、戦後から、経済成長期、またバブル経済を経て、日本経済や企業の経営環境は大きく変わりました。女性の社会進出についても、雇用機会均等法の施行もあり、年々進んでいます。公認会計士をとりまく環境も著しく変化しました。

特に最近は、公認会計士試験制度の改定により、受験者数、合格率、合格者数が急増し、会員数は平成12年（２０００）の約1万6千人から平成21年（２００９）12月時点で約2万8千人と、倍近くも増えました。それに比例するように、平成20年では３６００人超にもなる公認会計士試験合格者のうち女性が６００人超と約2割近くを占め、女性の公認会計士業界への更なる進出と活躍に大いに期待がかけられる状況となりました。しかし、平成21年には公認会計士合格者の就職難が新聞に取り上げられるようになり、金融庁による公認会計士試験制度の見直し論にまで発展しています。

このような状況の中、私たち日本公認会計士協会 近畿会 女性会計士委員会出版プロジェクト（以下「女性会計士委員会」）では、働く女性の一人として自らの、また、後に続くみなさんのキャリアビジョンについて考えてきました。

女性が公認会計士という資格や経験を得て、多様な社会の中でどのような

活躍、どのような社会貢献ができるのかを示したい、という熱い思いを持ったメンバーが集まっています。

過去に女性会計士委員会では、公認会計士制度発足50周年を記念して、平成10年（１９９８）に会員向けに『翔け 日本の女性会計士のあゆみ』を発刊しました。私たちの仕事内容というのはなかなか公認会計士以外の方にご理解いただくのは難しいことが多いのですが、今回は60周年を記念し、公認会計士以外の方々にも公認会計士の業界に目を向けてもらうために、この出版物を発刊させていただくこととしました。どこからでも興味を持った部分から読めるよう、また、読みやすく面白い内容とするよう、極力工夫させていただいたつもりです。

取り上げさせていただいた方々の働き方は様々ですが、いずれも自分らしくキャリアを構築されてきた方ばかりです。これをお読みになられた方々が、迷えるキャリアの指針に役立てていただければ、また、一人でも多くの方が公認会計士を目指していただければ大変うれしく思います。

公認会計士ってどうすればなれる？　どんな仕事？

公認会計士の試験制度は以下の通りです（２０１０年５月現在。公認会計士・監査審査会及び日本公認会計士協会のホームページより抜粋）。

公認会計士試験は、公認会計士になろうとする方々に必要な学識及びその応用能力等を有するかどうかを判定することを目的として、短答式（マークシート方式）及び論文式による筆記の方法により行われます。

短答式試験は、財務会計論、管理会計論、監査論及び企業法について行い、論文式試験は、短答式試験に合格した者及び免除された者について、会計学、監査論、企業法、租税法及び選択科目（経営学、経済学、民法、統計学のうち受験者があらかじめ選択する１科目）について行われます。なお、受験資格の制限はありません。

また、論文式試験合格後、公認会計士として登録するためには、２年以上の業務補助等の実務経験や実務補習所での研修及び修了考査が必要です。

公認会計士の活躍のフィールドとしては、日本公認会計士協会のホームページでは、仕事の魅力として、「監査法人でグローバルに活躍」「コンサルティング」「企業内会計士」「株式公開支援」の事例が掲載されています（２０１０

年5月現在）が、大きく分けて、監査業務と非監査業務に二分されます。

監査業務とは、クライアントが公表する財務諸表（決算書）の内容が正しいかどうかと第三者の立場から公正にチェックする業務です。対象となるクライアントは、日本で約３７００社ある上場会社に代表される一般事業会社の他、学校法人や病院、国や地方公共団体など様々です。

話題となったＮＨＫのドラマ「監査法人」では金融機関（銀行）、製造業（メーカー）、ソフトウェア販売業などが取り上げられていたのを記憶されている方もいらっしゃるでしょう。具体的な作業としては、クライアントが作成した財務諸表の数値が間違っていないか、粉飾決算でないかを確認するために、監査リスク評価のための社長との面談、帳簿に記された会計記録のチェック、棚卸の立会、現金等の実査等を行います。

監査業務は個人の公認会計士でも行うことは可能ですが、監査リスクの高まりにより、監査業務に関与している公認会計士のほとんどは監査法人という組織に属しています。監査法人の規模は大小さまざまですが、世界的にはビッグ４（アルファベット順＝Deloitte Touche Tohmatsu,Ernst&Young,KPMG,PricewaterhouseCoopers）と呼ばれる法人間の寡占状態にあり、日本ではそれぞれ有限責任監査法人トーマツ、新日本有限責任監査法人、有限責任あずさ監査法人、あらた監査法人が提携しています。

監査クライアントが海外に子会社等を有している場合はその在外子会社についても監査が必要ですし、逆に海外の会社が日本に進出して子会社をつくっている場合は親会社に監査報告を求められることがあるなど、監査業務は企業活動とともにグローバル化する傾向があります。

非監査業務を行う公認会計士は、大きく分けて、組織に属している場合と独立開業している場合に区分されます。組織に属する場合の主な例としては、企業等の経理部門の一員として、財務諸表を作成したり、企業内の内部監査を行ったり、コンサルティング会社に入社し、会計の知識を活かしたコンサルティングをすることもあります。また、独立開業の場合は、税理士登録をして税理士として業務を行ったり、コンサルティング業、セミナー講師や執筆等をしたりすることが代表的ですが、個人の力量によって得られる報酬や活躍のフィールドは様々です。最近では勝間和代さんが有名で、お名前を見ない日はないくらいメディアでご活躍されています。

第1章からは、より具体的に公認会計士の業務について知っていただけるように、身近な先輩公認会計士から大先輩にいたるまで、様々な分野でご活躍のみなさまにお話を伺っています。

ぜひ続けてお読みいただければ幸いです。

女性会計士20人　人生の中間決算書

はじめに　3

公認会計士ってどうすればなれる？　どんな仕事？　5

第1章　あなたの近くで活躍する先輩公認会計士　13

皆見 幸（かがやき監査法人 パートナー）　14
不正を行える環境を提供しないこと、それと「こぎれいでいること」が大事。

平林 亮子（平林公認会計士事務所所長 合同会社アールパートナーズ代表）　21
独立して分かった大切なこと。「決断前の慎重さ」より「決断後の誠実さ」。

山口 綾子（ＹＫＫ株式会社 グループ財務・経理センター経理グループ）　28
一般企業では他部署との折衝が不可欠、コミュニケーション能力が鍛えられます。

大西 かほる（野崎印刷紙業株式会社管理部経理課）　34
私の作品、有価証券報告書を世に出した時の感慨は忘れられない。

第2章 女性会計士の卵は、こんなことを考えている …… 41
座談会 ～キャリア、結婚、今後のこと…走り始めた私たちの本音について
1～3年目の若手女性会計士8人が語ります …… 43
第3章 監査法人というフィールド …… 55
大手監査法人の人事担当者2人が働く環境について語る …… 56
「女性が働きやすい職場は一朝一夕には出来ないけど、確実にいい方向に変わってきています」
鹿島 かおる（新日本有限責任監査法人 シニアパートナー）
土岐 祥子（あらた監査法人 パートナー）
榎本 尚子（仰星監査法人 パートナー） …… 69
「自分を信じなさい」と言い聞かせながら結婚、転職、出産、合併…の日々を愉しんでいます。
第4章 公認会計士に国境なし …… 77
後藤 順子（有限責任監査法人トーマツ パートナー） …… 79
「チャンスの神様の前髪」をつかもうと1日で即決したニューヨーク駐在。
重富 由香（Ernst & Young China パートナー） …… 86
異国で、もがいて努力している間に「自分は何者だろうか？」が消えていきました。

Yasuko（康子）Metcalf（KPMGシカゴ事務所 パートナー）
背中を押してくれた「君じゃダメなの？」自分のやり方でトライすることが大事だと。 92

宮川 明子（勤業衆信聯合会計師事務所〈デロイト台湾〉ディレクター）
原点は専業主婦。当時の気持ちを超えるものがあるかどうか、自問自答し続けています。 97

倉本 朋子（PWC株式会社トランザクションサービス部シニアマネージャー）
買収対象企業に短期間でハマること…知的好奇心と体力キープが必須です。 104

第5章 独立、というもう一つの選択肢 111

中森 真紀子（中森公認会計士事務所代表）
艦船から小舟への不安と「お客様からの報酬で稼ぐ」嬉しさと。 112

須藤 実和（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授 経営コンサルタント）
ココ・シャネルの言葉が私の座右の銘になっています。 117

根岸 良子（中央綜合税理士法人・株式会社中央綜合ビジネスコンサルティング代表）
何の欲も野望もなく、めぐり合わせの縁のお蔭かと。 124

第6章 新しいフィールドで働く公認会計士 131

栗原 貴子（大阪府豊中市議会議員）
「身のほど知らず」を乗り越え落ちこぼれ会計士、市会議員に。 132

辻山 栄子（早稲田大学商学部教授）
「本当に役に立つものは、すぐには役に立たない」このメッセージを次世代に伝えていきたい。 140

小森 尚子（英国シェフィールド大学会計学講師）
日本女性は、欧米女性とは違うやり方で社会における会計士の地位を確立してきた。 147

第7章 長く続けてきた末に発見したこと 155

西川 京子（西川公認会計士事務所所長）
もう少し若く会計士になっていたらあと1カ国駐在したかったです。 156

友永 道子（前日本公認会計士協会副会長）
私と会計士業界と、15年間の協会活動を振り返る。 163

おわりに 171
女性会計士委員会委員長 宮口亜希／前委員長 栗原貴子

寄稿
企業内会計士の可能性と、今後のネットワーク化への試み 40

ものしりコラム

①大手監査法人の女性ネットワーク 57
②監査法人とは／監査法人の統合 75
③監査法人における昇進 78
④M&A支援と公認会計士 105
⑤会計基準の設定主体 141
⑥日本公認会計士協会とは 164

ちょっとお茶の時間

その1〜会計士と電卓。その切っても切れない関係 76
その2〜公認会計士にはドレスコードがあるか？ 130
その3〜監査にマストの「出張」秘話アレコレ 154
その4〜ドラマ「監査法人」を本職が観たら!? 170

第4章

公認会計士に国境なし

働きたい場所と環境を、国を問わず自分の意思で見つけることができる公認会計士。
この章では海外で留学も仕事も結婚も昇進も！と
積極的に挑戦してきたボーダーレスな女性会計士たちの奮戦記をご紹介します。

ものしりコラム ❸

監査法人における昇進

気になる監査法人内の昇進は、年数に個人差がありますが、おおよそ次のようになっています。なお、呼称及び昇進年次は法人によって多少異なります。

1．スタッフ（S）：

公認会計士試験（昔でいうところの２次試験）合格後、
試験合格者として入社～４年目で公認会計士修了試験に合格し公認会計士になるまで

2．シニア（SNR）：

スタッフから昇格後、大体４年程度経験

3．マネジャー（M）：

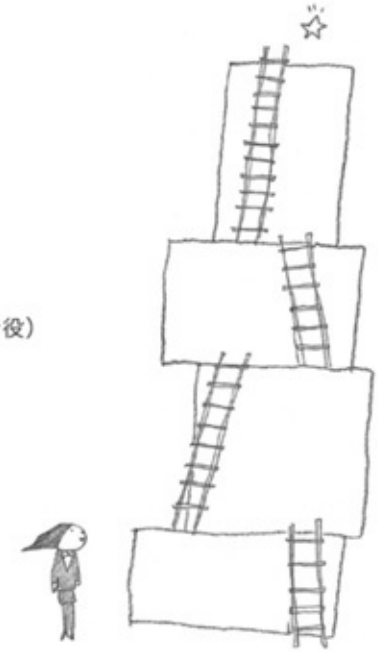
シニアから昇格後、大体４年程度経験

4．シニアマネジャー（SM）：

マネジャーから昇格後、３年程度経験

5．パートナー（P）：

一般企業で言う株主兼取締役（出資者であり、執行役）



後藤 順子

まずは、ニューヨークで「専門家をコーディネートしてクライアントに最高のサービスを提供する」チームを運営した、後藤さんのお話から。

ごとう よりこ
公認会計士
有限責任監査法人トーマツ パートナー

Profile 81年 大学卒業／83年 デロイト・ハスキンス・アンド・セルズ公認会計士共同事務所（現 有限責任監査法人トーマツ）入所／87年 公認会計士3次試験合格／93年 デロイト アンド トウシュ LLP ニューヨーク事務所に駐在／96年 パートナーに昇格／02年 東京事務所の金融インダストリーグループに帰任／04年 デロイト トウシュ トーマツ グローバル金融インダストリー日本代表補佐／07年 金融インダストリーグループ監査部門長 デロイト トウシュ トーマツ グローバル金融インダストリー日本代表（現任）／10年 金融本部長、経営会議メンバー

「チャンスの神様の前髪」をつかもうと1日で即決したニューヨーク駐在。

私の大学時代は男女雇用機会均等法といったものもなく、女性が自立するには、国家資格を取るのが最も手っ取り早く確実な方法でした。国家資格を一覧表にして、これはいや、こっちは無理、と消していった結果残ったのが、何の仕事やら一番イメージが湧かなかった、公認会計士だったのです。

公認会計士2次試験に合格して、比較的女性差別がないと言われた外資系の監査法人に入ったのですが、苦手な英語の辞書を引き引き四苦八苦しながらついて行くだけで精一杯。公認会計士として自分が事務所に残るイメージが浮かばず、数年勤務したら転職するのだろうか、と漠然と考えていました。

入所して5年たった時、米国に1週間研修に行かせてもらう機会がありました。その旅行が後のキャリアパスを決める大きなきっかけとなったのです。研修で立ち寄ったニューヨーク事務所で働く、スタッフの生き生きとした様子に「いつかここで仕事をしてみたい、そうか海外で働くという手もあるんだ！」と目からウロコがぽろぽろと落ちる気がして、そこから先は俄然元気になりました。

仕事にもすっかり定着した9年目についに海外駐在の話が。「チャンスの神

様には前髪しかない、後悔したくはない」と私は当然即決、相談した主人も仕事を辞めて一緒に行く（！）との即答でした。たった1日で駐在OKの回答に事務所の方がびっくりし、女性でも務まるようにその配慮の結果、駐在先は何と憧れのニューヨークでした。

新たな分野にチャレンジした結果その後のキャリアパスにつながった

初出社の朝のことは、今でも鮮明に覚えています。マンハッタンの街を歩きながら何とも言えない興奮がこみ上げ、「私のキャリアはここから始まるんだ！」と肩に力が入りまくっていました。

赴任先は日系企業部、ニューヨークに進出した日本企業向けサービスを総合的に提供する部門でした。日本企業のニューヨーク拠点は、本国では大会社でも現地では比較的小規模な会社が多く、本国のようにスタッフが揃っているわけでもないために、駐在されている方々の守備範囲が広く、その分何でも相談できるアドバイザーが求められていました。経営者の悩みに寄り添い一緒に考えるという経験は、私のプロフェッショナルとしての幅を大きく広げてくれました。

また、ニューヨークで驚いたのは、専門家の層の厚さです。クライアント

のどんな相談事であっても、解決できる専門家が事務所のどこかにいることの安心感は大きなものがありました。業務は非常に多忙で深夜まで働く毎日でしたが、いろいろなことが経験できる現場に満足していました。

そして1年後、新たなチャレンジが訪れました。日本人の男性パートナーの急な帰任により、後任が決まるまでの3ヵ月間だけ金融機関の担当を依頼されたのです。このときもチャンスの神様の髪型が思い浮かんだのですが、この前髪つかみが後々非常に大きな意味を持つとは想像もしませんでした。結局、後任は来ず、私が金融機関担当になったのです。

白だろうと黒だろうと「私はネズミが捕れる猫です」

前任者からの引き継ぎはスムーズに行きませんでした。最大クライアントの一つである企業の担当部長が、女性が責任者となることに難色を示したのです。前任者が「絶対に満足できると思うので、とにかく使ってみてほしい」とクライアントを説得して何とか担当になりました。私はその担当部長の信頼を得るために、テクニカルな情報提供はもとより、頻繁に懸案事項がないかを聞いたり、米人チームとのコミュニケーションを改善したり、と相当の時間を費やすことになりました。

その頃、頭の中には「白い猫でも黒い猫でも、ネズミを捕るのが良い猫」という鄧小平[※1]の言葉がいつもありました。「自分は毛並みは違うかもしれないがちゃんとネズミを捕ります」とクライアントの前に獲物を並べるのに必死でした。その結果、少しずつその方から課題を与えていただいたり、愚痴や相談事を持ちかけられたりし、そのうちに大規模なアドバイザリー業務を依頼していただき、最高のお客様になってくださいました。

96年にパートナーに昇格した頃、ちょうど金融機関の不祥事が相次ぎ、それに対応する特別プロジェクトが目白押しでした。また、不祥事の影響を受けて金融機関に対する規制当局の検査が急に厳しくなり、規制対応のニーズが高まっていました。そのような環境の下で様々な金融機関の課題を解決するようなバラエティに富んだサービス提供の機会が増え、金融機関担当部門の専門家たちとチームを組んでの仕事を多く経験することができました。

その結果、素晴らしい専門スキルと経験を持ったパートナーたちのプロ意識に刺激を受ける一方で、私自身は、クライアントの近くにいてホームドクターの役割を果たし、専門家をコーディネートして最高のサービスを提供するチームを運営する、という立ち位置をつかむことができました。

これは今でも私のクライアントサービスの基本姿勢になっています。

※1：鄧小平／かつての中国の最高実力者で、日中平和友好条約批准書交換や、イギリスのサッチャー首相との香港の返還交渉を行った人物。

忘れ得ぬ「9・11」の衝撃
茫然とする間もなく仕事の渦に

２００１年の夏、急遽日本に帰任することに決まった直後の9月11日に発生したのが、米国の同時多発テロです。ワールドトレードセンタービルには多くの日系金融機関が入居しており、犠牲者の中には日頃お世話になっていたクライアントの方が何名も含まれていました。向かいのビルにあった私の執務室も爆風で飛ばされてめちゃくちゃに破壊されました。あまりの出来事にしばらく何も手に付かず茫然とした毎日でしたが、日本で待っている仕事が、私を立ち直らせてくれました。

ニューヨークで私の仕事を引き継いでくれる後任の着任日が1年先になるため、ニューヨークのクライアントには帰任することを伝えられずに、東京とニューヨークを2週間ごとに行き来しながら、昼は現地の仕事を、夜は海外の仕事をする毎日を1年過ごしました。その間は夜中も携帯電話を手放せず、今から思い返しても、随分無茶なことをしたと思います。

東京に戻ってからは、英語を使って日本の金融機関にサービスを提供するとともに、ニューヨークで培った専門家のネットワークを生かして、日本の金融部門の業容拡大に注力しています。グローバル化した金融機関に対応するためには、グローバルな視点とフットワークの軽さ、そして英語力は業務

に不可欠だと感じています。

２０１０年秋に、金融本部長、経営会議メンバーになりました。女性の経営会議メンバーは私の所属法人では初めてだそうで、あるかと思われたガラスの天井がいつの間にか消えてしまっていたことに深い感慨を覚えます。私が経営陣の一員としての職務を果たすことで、頑張る後輩の女性たちには、ここまで来られますよ、と道筋を見せてあげられることをうれしく思っています。

私は、誰にとっても働きやすく実力を発揮しやすい職場や組織には優秀な人材が集まり、より大きな成長の力を生み出してくれるものと考えています。男女の違いだけでなく、国籍を含むさまざまなカルチャーの違いを乗り越えて、共に働ける組織を作っていきたいと思っています。

【後藤ノート】

□ 資格取得

・自分の人生は自分でデザイン、人生を誰かに決められたくない。自立力の決意をもとに選択

□ 就職

・国内系監査法人では女性の幸せは結婚と言われ、初の女性差別の壁に直面

・残りは、比較的女性差別がないと言われていた外資系監査法人から選択

□ 若手へのキャリア・アドバイス

・リーダーシップを磨くこと

・会計の世界だけに埋没せず、クライアントのビジネスをよく理解すること

・人的ネットワークを公認会計士業界の外にも広げておくこと

「皆がやっていないことをやってみたい」強い好奇心をバネに、香港でパートナーとなった重富さんのお話です。

重富 由香

しげとみ ゆか
公認会計士
Ernst & Young China パートナー

Profile 93年 大学卒業後、太田昭和監査法人(現新日本有限責任監査法人)入所／97年（日本）公認会計士３次試験合格／98年 Ernst & Young China 香港事務所へ駐在／01年 米国公認会計士試験合格、サーティフィケート取得（イリノイ州）／04年 香港公認会計士試験合格／06年 Ernst & Young China パートナーに昇格
現在、香港において監査報告書へのサイン資格(プラクティス・サーティフィケート)を有する唯一の日本人として、日系企業の監査に従事するとともに、香港及び中国華南地区の日系企業担当部門（ＪＢＳ）責任者として、日系企業へのサービス全般を担当

異国で、もがいて努力している間に「自分は何者だろうか？」が消えていきました。

香港では、女性パートナーの多くが子育てと仕事を両立しています。香港に来てから今年で12年目となりますが、20歳の頃の私は、将来このように長く海外で仕事をすることになるとは想像すらしていませんでした。

女性でも長く働き続けることができるであろうと、公認会計士となりましたが、監査法人に入ってみれば当然周りはみな同じ会計士です。その中に入れたことが嬉しい一方で、「自分がまだ何者でもないという漠然とした不安」が心の奥にありました。

そして、何か得意分野を見つけなくては埋没してしまうのではと次第に考えるようになり、当時周囲の人々があまり得意としていなかった英語に目をつけ、米国公認会計士（USCPA）[※1]試験の勉強をしてみたり、ラジオ英会話を聞いてみたりしました。ただ、当時福岡事務所勤務だった私は、普段英語に接する機会も少なく、独学で勉強していてもどの程度の効果があるかは疑問で、ましてや海外駐在など夢のまた夢といった状況でした。

そんな中、たまたま香港事務所が1年以上前から駐在員を募集したが誰も手を挙げないため、「地区事務所・経験の浅い・女性会計士」にチャンスが回っ

※1：USCPA／United States Certified Public Accountantの略語。

てきました。

十分な通訳すらできず 孤軍奮闘で消耗…そこで考える

ある程度の覚悟をしていたものの、駐在生活は当初順調とはいえませんでした。駐在員の基本業務は、お客様と現地の会計士の意思疎通をスムーズにするリエゾン業務[※2]と、新規顧客開拓業務です。

リエゾン業務では、専門的英語能力が未熟だった私はミーティングで十分な通訳ができず何度も穴があったら入りたい思いをし、日系企業に対するサービスに慣れていない現地の会計士に対するお客様からのクレーム対応に奔走する毎日でした。

また新規顧客開拓業務では、当たりをつけた会社のリストを片手に日々会社訪問。20代の私が、現地法人の社長相手に営業するわけですから、門前払いされることもあれば、勘違いで夜誘われることもありました。

それは、監査小六法[※3]を片手に監査調書を作っていればよかったそれまでの生活とは全く異なるものでした。当時他のビッグ5と呼ばれた会計事務所は、少ないところでも5人以上、多いところは20人以上の日本人を有していました。それに対して、前任者もいない中、一人で駐在していた私にとっては、

※2：リエゾン業務／仲介・連携・協働など主たる業務の橋渡しをする周辺業務を指す。

※3：監査小六法／弁護士の六法全書同様、監査をする公認会計士のバイブルである会計・監査の辞書のこと。現在は「会計監査六法」に名前が変わっている。

まさに孤軍奮闘の戦いで十分な成果がなかなか上がらず、自分のふがいなさに打ちのめされる毎日でした。

どうしたらサービスの向上を図りお客様の信頼を得ることができるか…。ひたすら考えた結果、まずは香港の会計税務、会社設立や清算のステップに関する日本語資料やQ&A集の作成から、各種セミナーの開催、お客様に対する満足度調査、現地の会計士に日本の文化を理解してもらうための交流会（という名の飲み会）などを思いつき、アイデアは即実行に移していきました。さらに、専門的英語能力を少しでも早く向上させようという思いから米国公認会計士試験も受験しました。

現地の公認会計士となりパートナーの道が開かれる

3年が過ぎ大体物事がスムーズに進むようになると、次のジレンマは、リエゾン業務だけではお客様と現地の会計士との溝を完全に埋めることができないということでした。監査上の問題が発生した場合に対立するお客様と現地会計士の間を右往左往するばかりで、直接問題を解決できません。

監査の第一線の仕事をしていないと監査の勘が鈍るという不安からチャレンジしたのが、香港公認会計士資格取得です。無事合格した後には日系企業

のインチャージ[※4]を任され、直接担当したお客様に喜ばれるとともに、法人内の現地会計士に対しても説得力を持ってリエゾンを行えることができるようになりました。こうして監査の現場に立ち始めて気付いたことは、最終的にはパートナーとして監査報告書にサインをすることで十分な責任を果たすことがきるのではないかということでした。

しかし、これは中国本土を含めた範囲でのパートナーとしての無限責任を負うことであり、毎年の売上や利益率のノルマを負うことを意味し、法人内の他のパートナーにとっては、毎年売り上げを競い合うライバルとなるわけですから、簡単なことではありません。

当時香港ではパートナーになれるのは一握りの選ばれた人のみというかなりの狭き門でした。そのような中で、多様な経歴を持ったパートナーが必要との議論があったのか、「香港でも会計士資格を取った物好きな日本人会計士がいる」ということが目に留まったのかはわかりませんが、幸運にも、２００６年にパートナーへ昇進することができました。

そして私生活でも、趣味の太極拳で知り合った今の夫と再婚して、娘と息子をもうけることができたのです。

結果を恐れず、この地で前向きにチャレンジし続けたい

※4：インチャージ／監査現場の責任者を指す。

パートナーへの昇進は本当の戦いの始まりで、いかにお客様に喜ばれるサービスを提供するのか、割り振られる売上や利益率のターゲットをどうやってクリアするのかなど、毎年が生き残りをかけた勝負です。

従って、今でも全く気の抜けない毎日ではありますが、これも変化がめまぐるしい中国・香港に身を置くことを選んだ者の宿命ととらえ、常に新しい挑戦に向かうことができる体力と柔軟性を磨いていきたいと思っています。

今後は、日本からの駐在員の育成と、中国・香港の地元の会計士の育成、特に、専門知識のみでなく、日系企業に対するサービスの精神を植え込むことに力を注ぎたいと考えています。

【重富ノート】

□ 香港事情

・住み込みの外国人の手伝いさんを雇い女性が働くことが当たり前

□ 若手へのアドバイス

・その時々で自分がより納得のいく仕事をするために必要なことを実行

・「皆がやっていないことをやってみたい」という好奇心

・全力疾走ではなく、周りの風景を楽しんだり、障害物につまずいたりしても、ひたすら一定のペースでジョグを継続

Yasuko（康子）Metcalf

従来のやり方が全く通じないタイの駐在経験で「物事の本質に迫り、自分なりに考える」ことの重要さを知った康子さんのお話です。

ヤスコ メットキャフ
米国公認会計士
KPMGシカゴ事務所 パートナー

Profile 88年 米国の大学卒業後、デロイトハスキンズ・ミネアポリス事務所に監査アソシエートとして入所／89年 米国公認会計士（USCPA）試験合格／90年 KPMGシカゴ事務所に転職／99年〜03年 KPMGバンコク事務所駐在／00年 KPMGシカゴ事務所の監査パートナーに就任

背中を押してくれた「君じゃダメなの？」自分のやり方でトライすることが大事だと。

留学を決めたのは高校3年の時でした。当時、進学についての親の条件は自宅通学か、でなければ田舎の大学。東京はアウト、関西の大学か、田舎の大学かと迷ったあげく結局、留学をすることにしました。高校がカトリックの女子校であったこともあり、選んだのはアメリカ中西部に位置するミネソタ州のカトリック系のセントトーマス大学でした。「せっかく留学するならあまり日本人がいない所で本当のアメリカ文化と語学を学びなさい」が父からのメッセージでしたが、このアドバイスが今の私の基盤となっています。

アメリカの大学を卒業後、すぐ日本に帰ろうかとの思いもありましたが、せっかく会計学を専攻したのだし、USCPA（米国公認会計士）の資格だけは取得した方がいいのではと、ミネアポリスの4大会計事務所の1つに就職しました。いざ仕事を始めると、これは想像していた以上に厳しいものでした。

監査は数字を追っていくというイメージを持っていましたが、実際は、仕事時間の半分以上を調書作りに割かなければなりませんでした。調書の作成の段になると、英語が母国語でない私は、同期に比べ、はるかに時間がかかってしまいます。

採用時に外国人として差別を受けることが無かったように、評価の時も、別に外国人だから甘くみてくれると言う事も当然無いわけで、隠れて仕事を家に持ち帰り、ああでもないこうでもない、と奮闘していました。

2年の歳月が経ちましたが、仕事をすればするほど、アメリカ人の中でアメリカ人として仕事を続けるべきかどうか迷いが出てきました。

結局、新たな可能性を求めて、アメリカで会計士の仕事を続ける道を選択し、現在のシカゴ事務所への転職を決めました。

順風満帆から「挑戦」に
忘れ得ぬ上司のひとこと

公認会計士としての経験も浅い私でしたが、担当した日系クライアントから重宝していただき、日々新鮮な驚きと緊張感をもって仕事に取り組ませていただきました。お陰様で、今までになかったやりがいを感じることができました。下手すると年齢が2倍近く違ったクライアントに、仕事上では指導するという立場だったのかもしれませんが、学ばせていただいた事の方がはるかに多かったかと思います。

日系企業の会計監査にも慣れはじめ、順調にマネジャー、シニアマネジャーと昇格させてもらい、結婚、出産と忙しく毎日を送っていました。そんな時

に、シカゴ事務所の事務所長ゲリーは私を見るなり、〝What do you think of going to Bangkok?（バンコクに行ってみないか）〟と切り出しました。

まず私の頭に浮かんできたのは、なぜ私にこんな仕事が回ってくるのだろうか？　もしかして、ゲリーは、私にタイ語が解ると勘違いしているのではないだろうか？　いくらアメリカ人にアジアについての常識に欠ける人が多いとは言うものの、日本とタイとを一緒くたにしているはずはない。恐る恐る、〝Gary, just to confirm, you know I am Japanese?〟　私はタイに行ったことも無いし、もちろんタイ語の読み書きなどできないのだと伝えました。

ゲリーの返事は意外でした。日本人だからとか、女だからとか、2児の母だからという先入観が彼には無かったのです。ゲリーが〝Why Not You?（何か君で問題があるの）〟と聞いたのは、私が会計士として成長していくための次のステップに必要であり適切なチャレンジだから声を掛けたという、単純な理由だけだったのです。ゲリーとのこの会話は、その後の私のキャリアを考える上で大きな影響を及ぼすこととなりました。〝Why Not Me?〟か。

タイの常識＝アメリカの非常識の中で「まず本当に大切なこと」を考える

タイでの仕事は困惑の繰り返しでした。どうしてこういうやり方をするん

だろうか？　どうして、こういう結論になるんだろうか？　会計的にも、仕事の進め方にしても、不思議なことの連続でした。

しかし、バンコクに来てみて、アメリカで仕事をしている時に私の周りで言われていた事が必ずしも正しい、或いは唯一の方法ではないのだと実感することが出来ました。徐々にではありますが、試行錯誤の結果、相手も少しずつ私のロジックを理解し、それなりに尊重してくれるようになり、事前にいろいろな相談を受ける様にもなりました。

私の方も、多様性を現実のこととして理解し、先入観を持たずに事実に対峙することを会得する様になりました。タイでの経験は、おのずから自分のポジションを改めて考え、確立する場ともなったように思います。相手を説得するには、まずは自分自身をはっきり認識していなければなりません。

バンコク駐在が与えてくれた最高のプレゼントは、自分らしさって何かを考えさせてくれたことでした。これらの経験は、私流があってもいいんだと考える余裕も必要だと思います。すべてが相対的な中にいるわけですから、重要なのは、本質的に大切な事は何かということであり、その質問には必ず答えなければならない、答えられれば良いのだと思います。

バンコクに駐在中は何時にも増して、このことを自問自答していましたが、これが、ある意味、今の自信につながったと思います。これからも巡ってくるチャンスは、〝Why Not Me〟精神で、トライし続けたいと思っています。

子供2人の専業主婦から公認会計士になり、大手監査法人のパートナーとして台湾に駐在する宮川さんを育んだ原動力について。

宮川 明子

みやかわ あきこ
公認会計士
有限責任監査法人トーマツ パートナー
勤業衆信聯合会計師事務所(デロイト台湾)ディレクター

Profile 78年 大学卒業／78年 外資系銀行勤務／81年 結婚、専業主婦／87年 丸の内会計事務所(現有限責任監査法人トーマツ)名古屋事務所にて非常勤で勤務／94年 公認会計士2次試験合格 有限責任監査法人トーマツ名古屋事務所にて常勤として入所／98年 公認会計士3次試験合格／05年 パートナー昇格／08年 デロイト トウシュトーマツの台湾メンバーファーム勤業衆信聯合会計師事務所（デロイト台湾）に駐在

原点は専業主婦。当時の気持ちを超えるものがあるかどうか、自問自答し続けています。

学生時代、将来の夢はお嫁さんであり、人と違うことをするのに臆病な性格から、念願かなって専業主婦になりました。しかし、友人が仕事で活躍しているのをうらやましく思い、いつかは働きたいという希望がむくむくと頭をもたげてきました。思えば東京で育ち、自由な学生生活をおくり、ＯＬを3年弱やった後の、名古屋での専業主婦や子育ては全く別の世界でした。

だから、外に出ることができるというのが大きな魅力となり、会計事務所でのアルバイトを決めました。職場では若い人たちが資格を持って生き生きと監査人として働いている姿がとてもかっこよく見えました。

「今さらの受験は時間がかかって難しいよ」と先輩や家族もいい顔をしませんでしたが、この事務所に居るなら資格があれば役に立つと思え、公認会計士試験の受験勉強を始めました。

さすがに時間がかかり、小さな子供を2人抱えながら、かつ、働きながら試験に4度挑戦して何とかめでたく合格。そして、監査法人で毎日監査の仕事が始まりました。年をとってからの合格であったため、仕事の速度が遅いことや記憶力の減退と戦い、若い仲間に教わりながら、必死で目前の仕事を

こなすのみ、あまり他のことを考える余裕はなかったです。

苦しいことが重なって、辞めようかと思ったこともあります。そのとき、「苦しくて辞めても、必ず、いい方向にいくとは限らない」と上司からアドバイスをもらいました。困難を克服するうちに次の苦しいことがたいしたことのないように思え、いろいろなクライアントと仕事ができること、クライアントに喜んでもらえること、社会的な責任を果たせるという充実感が得られました。

このころ、娘たちは一番の理解者になってくれました。娘たちは心の支えです。彼女らが子供を生んで働くようになったら、今度は私がバックアップしようと思っています。

「人と違うことをしたい」気持ちに素直に従って台湾行きを決める

さて、こんなに長く勤めることになるとは当初は思っていませんでしたが、いつの間にか監査法人の看板を背負って仕事をするようになっていました。

私は大学卒業後に勤めた銀行で英文財務諸表分析などをしていましたので、英語の文書を読んだり書いたりするのに抵抗がなく、名古屋事務所では、海外がらみの仕事を頼まれることが多かったのです。そのため、一緒に仕事を

した人も多く、いろいろな人に名前や顔を覚えてもらえました。そのおかげで名古屋事務所2人目の女性パートナーになりました。

仕事も一定のレベルをこなせるようになり、子供が大学に入って独立した頃から、少し余裕が出てきました。「人と同じことをしたい」私ではなく、「人と違うことがしてみたい」という虫がうずきだしました。「この年になって今さら…」と昔の私だったら思ったでしょうが、なぜか止まらない自分がいました。

そこに海外駐在員の募集です。トーマツは性別や年齢の差別のない素晴らしい組織で、かなり年上の私が行ける場所があるのか、また英語が少しできるだけで、他の言語ができない私でも可能なのか、不安はありましたが、なんとデロイト台湾に赴任できることになりました。

こうして現在、台湾単身駐在1年半となります。日本ではずっと監査中心でしたが、こちらでは投資相談、会社設立、ビザ申請、税務、監査、記帳代行業務と台湾に進出する日系企業の支援を何でもこなします。

さらに重要なのは〝Practice Development〟つまり、営業です。営業をしたことのない私は、初めての経験に戸惑うことばかりで、試行錯誤の連続でしたがだんだん慣れてきました。日本人の女性駐在員は少ないので、すぐ顔を覚えてもらえるというメリットもあります。

台湾の会計業界では女性は珍しくなく、一緒に働いてくれる人がたくさん居

るので、とてもやりやすいです。また女性が働くことに対して、当然という風潮があり、残業なども問題なくこなすので立派だなあと思っています。

今はまだ中国語がつたないのでなかなか深い話ができませんが、なるべく台湾人に混じって、中国語を話し、異文化交流を図っています。非常に親日的で、日本と地理的にも文化的にも近いので分かり合えることも多い一方で、全然違う習慣もあり、そんなことを教わりながら生活と仕事を楽しんでいます。今は、苦労して得たものは必ず実になっていくということを痛感しています。

最後に、娘たちは休みになると遊びに来て、知見を深めています。母親として娘たちの国際感覚を磨く一助になればいいなと思っています。

挑戦し続ける刺激的な「先輩」へ。娘から母親へメッセージ——　宮川典子

「東京で働いたら？」「仕事内容は働いてみないと実際は分からないじゃない？　仕事内容が好きでも、一緒に仕事をする先輩、同僚が合わなければ仕事は続かないから、迷うなら会社の先輩や、内定者を見て、決めてみるのもいいんじゃない？」

内定を頂いた2社のうちから、社会人としてのスタートの場所を選ぶのに

1ヵ月も迷っていた私への「先輩」からの印象的な言葉です。今ある私は24年間、この「先輩」に間違いなく多大な影響を受けてきました。

「先輩」は私が中学校入学時に、公認会計士になりました。平日に仕事に出かけるのはそれまでと変わりませんでしたが、忙しさは、公認会計士になってから格段に増したと思います。

「普通のお母さん」とは異なり、家にはいない、お弁当も普段はなし、ということを寂しく思ったこともあります。反発して喧嘩したこともあります。でも、「じゃあ仕事辞めようか？」という一言にはどうしても首を縦にふることはできませんでした。

母親として基本的に必要なことはしてくれていました。仕事でどうしても無理な時以外は、私が風邪をひくと仕事を休み、面倒を見てくれました。自宅は最寄の駅から遠く、通学時に雨の日は車で駅まで送ってくれました。仕事で夜遅いのによくあんな朝早くに起きてくれたと、今自分自身が仕事をするようになってみて、ただ驚くばかりです。

「普通のお母さん」ではありませんでしたが、仕事から得る刺激のせいでしょうか、「普通のお母さん」以上に活き活きとしていて、よく友人からは「若い！」と言われました。

「先輩」の背中は、娘である私たちにとって常に刺激になりました。仕事の細かい内容まで私たちに明かすことはありませんでしたが、家庭以外に世界

を持ち、その中で奮闘し、成果を出していた「先輩」の挑戦し続ける姿は、多少の困難があってもがんばらなきゃ、という娘たちの根性に繋がっているのだと思います。「父親の背中を見て育つ」代わりに、私たちは言わば「母親の背中を見て」育ちました。

「台湾に行こうかと思っているのだけど…」と聞いたときは、妹と共に驚きました。まだ挑戦を続けるんだ、という「先輩」を応援しようね、そう妹と話しました。

社会人として働くようになり、ますます「先輩」を尊敬するようになっています。時には、台湾に行き母としての「先輩」に甘え、時には社会人としての「先輩」にアドバイスをもらいます。「先輩」は私の大きな目標なのです。

【宮川ノート】

□ 資格取得

・公認会計士になったのは偶然

・目の前にぶら下がったニンジンに飛びつくかどうか

・その都度その都度判断してきた運命ともいえる結果

□ キャリアアドバイス

・一度始めたことは簡単にはあきらめない、常に好奇心を持つ

外国企業の日本への投資、その逆も両方こなす倉本さんは「公認会計士に国境なし」を言葉通り実践するプロフェッショナルです。

倉本 朋子

くらもと ともこ
米国公認会計士
PWC株式会社トランザクションサービス部シニアマネージャー

Profile 98年 米国公認会計士試験合格／99年大学卒業後、ゴールドマンサックス証券に勤務／01年 プライスウォーターハウスクーパース（PwC）中国法人上海事務所入所。法定監査、中国でビジネス展開している日系企業向サービスに従事／02年 中央青山監査法人トランザクションサービス部に入所、M&A に絡む財務デューデリジェンス業務に関与
現在 PWC 株式会社トランザクションサービス部シニアマネージャーとして、主に欧米系のプライベートエクイティファンドによる日本企業への投資を専門とするが、中国企業による日本企業への投資及び日本企業による中国投資という中国関連の out-in, in-out 案件にも多数関与

ものしりコラム ❹

M&A支援と公認会計士

大規模な企業買収、組織再編、経営統合が新聞やテレビのニュースで取り上げられることがありますが、その裏では多くのケースで、戦略立案、資産価値評価から買収後の統合に至るまで、様々な局面で公認会計士が関わっています。この業務はFAS（Financial Advisory Services）業務と呼ばれ、M＆A（合併や買収）を成功に導くための実行支援、アドバイザリー、企業価値や資産価値の評価等を行うなどの業務内容です。これは、1回限りの非定型業務であることや世間に与えるインパクトが大きいことなどにより、やりがいを求めてぜひやってみたいと希望する公認会計士も多数います。

M＆Aアドバイザリー業務の1つである買収対象企業の財務調査（財務デューデリジェンス）を依頼する主なクライアントの一つには、いわゆる“ハゲタカ”と揶揄される外資系プライベートエクイティファンドがあります。その要求水準はきわめて高く、英語の報告書が必須ゆえ、様々なバックグラウンドを持つ多言語、多国籍のクロスボーダーチームでクロスボーダー案件業務に特化した業務となります。ゆえに、公認会計士とは本当に国境なき職業だと思います。

買収対象企業に短期間でハマること…
知的好奇心と体力キープが必須です。

大学時代、当初は会計士資格取得を視野に入れ、日商簿記1級を取得したりしていましたが、2年生頃から中国及び中国語を専門とする外交官を志すようになっていました。ところが、北京大学への交換留学を志願したものの見事選考落ち。仕方がないので他に希望者のいなかったオーストラリアのシドニー大学への留学を決めました。消極的選択で決まった英語圏への留学でしたが、ここで専攻した中国語と会計学が、今の私のキャリアを構築する基礎となりました。大学卒業後、ゴールドマン・サックス証券で2年間勤務した後、結局、中国関連の仕事に従事したいという思いが捨てきれず、プライスウォーターハウスクーパース(PwC)中国法人の上海事務所への転職を決め、2001年に私の会計士人生1年目がスタートしました。

大学卒業前に、米国公認会計士試験に合格していたため、上海事務所では会計士1年目ジュニアスタッフとして入所しました。当時、日本人は駐在員マネジャーと私の2名のみ。監査初心者としての業務研修を受ける一方で、日本企業の子会社に対して、中国人会計士チームの一員として、中国語での監査業務に従事していました。

上海といえば、きらびやかな夜景と高層ビル群を思い浮かべるかもしれませんが、実際の監査の現場は、上海からタクシーで2時間程度の郊外にある埃舞い散る工場地帯がメインで、繁忙期になると、上海で過ごすのは週末だけという暮らしぶりでした。その一方で、日本企業向けのサービスがいかなるものかという営業の基本精神を叩き込まれ、約2年間寝る間も惜しんで働き、会計士としての基本を学ぶ貴重な日々を過ごしました。

公認会計士という職業の大きな魅力の一つは、自分の意思で、自分の行きたい場所、自分の働きたい環境を、国を問わず見つけることができるという点です。世界中の大抵の場所には日本の大企業が進出していますので世界中で活躍できます。そういう点で公認会計士にかなう職業は、なかなかないのではないでしょうか？

M&Aは急転直下の展開が「日常」ルーティンワークなど存在しない

中国で約2年間の勤務を経て、日本へ帰国してからは一貫して大手監査法人傘下のアドバイザリー部門において、M&Aに絡んで買収対象企業の財務調査に従事する財務デューデリジェンス業務[※1]に携わってきました。

財務デューデリジェンス業務というのは、いくつか特徴的な点があります。

※1：（財務）デューデリジェンス／投資やM&A等を行う検討段階で、投資実行後に不測の損失やリスクが発生することを避ける目的で、事前に投資対象の財政状況や法務のリスクマネジメント状況などを精査する作業のこと。

例えば、M&Aのようなディールもしくはトランザクション[※2]と呼ばれる分野は、監査とは違って、年間スケジュールのような決まったタイムラインがあるわけではなく、案件が発生したら、毎日が非常事態のような日々に陥ります。案件はある日突然発生することもあれば、ある日突然消滅することもあり、事態が1日のうちに急転直下することも日常茶飯事です。

買収対象企業の調査に出かける際に、身分がバレないように扮装したり、報告書提出前には徹夜の日々が続いたり、何十億、何百億、時には何千億というお金が動く世界は、まさしく非日常の世界。

また、買収対象企業というのは、毎回その案件ごとに違いますので、新しいプロジェクトに関与するたびに、新しい会社そして新しいビジネスを一から解読していくことが必要になってきます。2週間からせいぜい2ヵ月程度の短期間の内に、どっぷりとその会社にハマり、そのビジネスの全てに精通することが要求されますので、知的好奇心を高レベルに保つことが不可欠になります。

また、プロジェクト、案件ベースで動く業務であるため、報告書が完成して期限内に提出できたときの開放感、報告会で直接クライアントから好評を得られたときの達成感、案件が成立し新聞報道などを通じて公になったときの安堵感はひとしおです。

もちろん、スケジュール調整の難しさ、案件実施時の緊急対応、報告書提

※2：トランザクション／関連する複数の処理を一つの処理単位としてまとめたものを言う。

出期限前の残業等々、女性会計士にとってはなかなか厳しい業務であるのは事実ですが、メリハリのある日々を過ごすことができるため、自分の中で譲れる点、譲れない点を明確にすることにより、意外と難なく乗り切ることができました。

「外資系」ファンドを担当することの厳しさ、面白さ

現在私が主に担当しているクライアントは、世間的にはいわゆる「ハゲタカ」と揶揄されがちな外資系のプライベートエクイティファンド[※3]です。彼らは、投資のプロ中のプロであり、世界中でPwCを含むビッグ4と呼ばれる同業者からトップレベルのサービスとトップクライアントとしての扱いを受けており、我々に対する要求水準もきわめて高く、当然ながら、英語での報告書作成が必須となるため、私の所属する部門ではクロスボーダーチームとよばれるバイリンガル対応の専門チームを結成しています。

日本の公認会計士だけでなく、さまざまな国での公認会計士としての過去の経験を生かす場であると共に、これから海外での活躍を目指す日本人公認会計士にとっての修業の場でもあるため、さまざまなバックグラウンドを持つ、多言語、多国籍のチーム構成となっています。

※3：プライベートエクイティファンド／株式を公開・上場していない企業の株式に投資し、その企業の成長や再生の支援を行うことを通じて株式価値を高め、その後IPO（株式上場）や他社への売却を通じて利益を得る投資ファンドのことを言う。

また、普段はクライアントに対して、調査業務を提供している立場ではありますが、昨年当社が、バイヤー側に立つM＆Aを実施する案件が発生した際には、バイヤーとしてのデューデリジェンス調査業務、銀行からの資金調達、ならびに、売主側との売買契約書の締結調整を担当するという一大任務を仰せつかり、私自身がM＆Aの当事者という立場を経験しました。

そこでは、M＆Aというものが、当事者にとって非日常の重大事件であり、それを周りで支える会計・財務や法務の専門知識を持ったアドバイザーへの期待がいかに高いものであるか、身をもって実感でき、今後この業務を続けていくに当たって大きな収穫となりました。

以上、私の経験が、特に、クロスボーダー会計士を目指したい若手の参考になれば幸いです。

【倉本ノート】

□ キャリアアドバイス

・キャリア年表の作成（中長期的な目標に向かって行動）

・「戦友」を作る

・空白期間のない履歴書（↑最も意識していることの一つ）

・語学の習得（英語、できればもう一言語）

第5章

独立、というもう一つの選択肢

この章では、監査法人勤務でも企業内会計士でもない。
公認会計士として「起業」し、新しい世界を手に入れた先輩3人に、
自らの道程を綴っていただきました。

中森さんは独立後2人のお子さんを育てながら、上場会社の社外役員という社会的責任が問われるポジションで活躍されています。

中森 真紀子

なかもり まきこ
公認会計士・税理士
中森公認会計士事務所代表
二女の母

Profile 87年 大学卒業後、NTTに勤務／91年 井上斉藤英和監査法人（当時アーサー・アンダーセン、現有限責任あずさ監査法人）入所／96年 公認会計士3次試験合格／98年 独立、中森公認会計士事務所開設／10年 株式会社フィデス会計社を設立、代表取締役

監査に加え被監査会社の会計業務支援、デューデリジェンス、組織再編、企業評価算定、民事再生業務などに従事。
また外資系上場企業、ベンチャー企業等の社外監査役としての長年の経験に基づき企業統治および内部統制に関する助言も行う。海外での子ども支援活動を展開するNPOのサポートにも注力。

艦船から小舟への不安と「お客様からの報酬で稼ぐ」嬉しさと。

公認会計士の勉強を始めて1年半後に2次試験に合格し、監査法人に就職。早くから現場も任され充実していたのですが、5年目を過ぎた頃から顧客の近くで直接喜ばれる仕事をしてみたいという気持ちが大きくなってきました。

先に監査法人を辞めた同期の友人に話を聞くと、独立してやっていくのも面白そうです。自分の時間をコントロールできるという点にも惹かれました。監査法人を続けていくか迷いましたが、友人の好意で青山にある事務所を使わせてもらえることになり、思い切って自分の事業をスタートしました。

独立した当時の心境は今でもよく覚えています。艦船から小舟に乗り移り大きな海へ一人漕ぎ出すような、そんな心細さでした。でも一方で自分自身の顧客から報酬をもらうということは、とても新鮮でやりがいがありました。

上場企業の社外役員といえど求められているのは「会計士の発言」

現在は外資系やベンチャー企業の会計業務支援、デューデリジェンス、組

織再編、企業評価算定、民事再生業務などに関わっています。また以前より企業の社外役員を勤めてきています。

社外役員となるきっかけは、監査法人時代に現場責任者として関与していた会社から、監査役会を拡充したいので就任してもらえないかと声をかけられたことでした。会社の事情をよく知っており、英語でのコミュニケーションに問題ないという点が先方のニーズと合っていたと聞いています。

社外役員としての責任は軽いものではありません。場合によってはトップマネジメントに対しても言うべきことはきちんと伝えるという強い気持ちが必要ですし、それが社外役員に期待される役割のひとつでもあります。一方で仕事のやり甲斐も大きいものがあります。

中でも一番の醍醐味は、実際に行われている企業の経営活動にじかに触れることができる点でしょう。全体像とプロセスを把握し、問題点を理解した上で経営の実態を知ることで見方がぐっと広がります。就任当初は細部に気をとられることが多かったのですが、しばらくすると物事を大所高所で見ることの重要性に気付くようになりました。

普段から心がけているのは、公認会計士という職業専門家としての立場での発言を忘れないという点です。女性の役員は少ないですが、だからといって特にデメリットを感じたことはありません。柔らかなコミュニケーションスタイルであっても、自分の意見を簡潔かつ明確に伝えることができれば支

※1：公開企業における第三者委員会／企業においてマネジメント・バイアウトを行うときや不正・不祥事の発覚した際などに、会社内部の調査に透明性・客観性を担保するために設置される調査のための機関。

障はありません。

役員として関与する企業や業種については自然に情報が集まりますし、それが一つの基準となって他企業との比較知識として蓄積していきます。同時に、関与先へも他企業の事例による気づきをフィードバックできます。このような社外役員の経験を買われたのでしょうか、他の企業の役員や、最近では公開企業における第三者委員会[※1]の委員などへの就任依頼も頂くようになってきています。

このように独立開業している公認会計士のフィールドは、監査法人時代に理解していた範囲よりずっと広いと実感しています。もちろん公認会計士としての専門知識や監査経験がベースになっていますが、加えて実務では財務、税務、内部統制、コーポレートガバナンスおよびこれらに関連する法律知識などを一緒に、状況に応じてマネジメントに助言・サポートをすると喜ばれるということがわかってきました。今後も業務の枠を限定することなく、自分に求められるサービスを柔軟に提供していけたらと考えているところです。

もっと頭を柔らかくして会計士の未来を考えてみて

最近は独立しても記帳代行ばかりで仕事がない、若手会計士の方からそん

【中森ノート】

□ 公認会計士資格を取得したきっかけ

大学卒業後の就職先は当時民営化したばかりのNTT、男女雇用機会均等法施行後の総合職第二期です。経営企画部に配属され朝から晩まで本社ビルにこもって働く日々でした。入社して3年目に現在の夫と職場で知り合い、まもなく結婚という流れになりました。ここでのキャリアを続けるか迷いましたがいったん退職することにしたのです。

結婚後しばらくは家にいましたが、やはり働きたくて就職活動を始めました。しかし経験も特技もなく上手くいきません。そんなとき公認会計士の需要が高まっているという記事を読み、資格があれば再就職しやすいだろうと思って専門学校に通い始めました。

□ 独立を目指す方へ

I. 自由と不安定のバランスを楽しむ

時間も人生も自分で決めることが好きで、このバランスを楽しめる人ならば

な話を聞いて少々驚きました。私には公認会計士の活躍できる世界は広く、無限といってもいいくらいだと思えるからです。公認会計士が持つ情報は世の中の役に立ちます。必ずしもハイレベルなものばかりでなくていい、一般的な会計の知識を必要としている人や組織はたくさん存在するのです。その可能性をどう感じどのように関わっていくかは、まさに自分次第だと考えています。

最後になりますが、公認会計士の資格を最大限に活用して後輩の皆さんがますます活躍の場を広げられることを願っています。

きっと独立開業に向く。

2. 人とのつながりは続く

仕事を一緒にするなかで生まれる信頼関係のきずなはとても固く、何年たっても変わらない。

3. 仕事のフィールドは無限

□ 子どもを生み育てながら働き続けたいと考えている人へ

1. 子育てと仕事の二兎を追う

女性が仕事を続けていく際に一番重要なのは、キャリアを中断させないこと。

2. 時間管理について

(1)他人の時間をもらう

人の手を借りることをためらわないことが一番大事。例えばベビーシッターさんに頼むことも検討してみては。

(2)不要なこだわりを捨てる

そのこだわりは本当に必要か、もっとシンプルなやり方はないかどうかを探してみることは効果的。

(3)家庭内のことも仕組みで回す

家庭でも我が家に合った仕組みを作ることで、仕事モードへの切り替えがスムーズになる。

須藤 実和

大学院等で教鞭を執り、著書も有名で雑誌で紹介されることも多い須藤さん。ユニークな経歴の中にも、彼女の着実な足跡を見ることができます。

すとう みわ
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科教授
経営コンサルタント、公認会計士

Profile 大学院卒業後、博報堂マーケティング局勤務／公認会計士としてアーサー・アンダーセンにて監査業務、買収監査に従事／シュローダー・ベンチャーズで、ベンチャー企業投資育成業務に従事／戦略系経営コンサルティング会社ベイン・アンド・カンパニーのパートナーとして、顧客企業のコンサルティング活動に加えて講演・執筆活動を行う／現在は、国内大手企業の経営支援、人材開発支援に携わるとともに、大学における講義・企業研修・講演・執筆活動に従事
主な著書／『実況LIVE：マーケティング実践講座』（ダイヤモンド社）、『企業戦略を考える』（日本経済新聞社、共著）、『実況LIVE コンサルティング実践講座』（ダイヤモンド社）

ココ・シャネルの言葉が私の座右の銘になっています。

現在、経営コンサルタントという仕事につき、大学でビジネス実務の講義を行っていることに、一番、驚いているのは、私自身かもしれません。

というのも、10代の私は、生命科学の研究者を目指して大学の研究室に引き籠り、毎日、実験器具と格闘していました。そんな私にとって最初の転機は、大学院2年生の時に参加した会合でした。もっと産学協同を進めていかなければ、日本の科学は思うように発展しないのではないか…会合でおきた議論から強い衝撃を受けた私は、1ヵ月間考えた末、今から考えるとただの思いつきのような決意ですが、科学をPRするため、と、さっそく広告会社への就職活動を始めたのです。このような「変わり種」を幸運にも博報堂に雇っていただいて、晴れて広告ウーマンとしての私の社会人生活がスタートしたわけです。

ピピン！と反応した
カルティエの名刺入れ

さまざまな業種のクライアント企業のマーケティング活動に関わる博報堂の仕事は、まさにビジネスの最前線にいる感じで、大いに新鮮で刺激的でした。しかし、一方で、経済、経営、財務といったビジネスの基礎ともいえる領域に関する知識が足りない、ということに不安を覚えるようになったのです。

きっと今の私がその当時の私から相談を受けたら「仕事をやりながらでも勉強することは充分出来るし、実務の中から学べるものがあるはず」とアドバイスしたと思いますが、不安が募ってきた私は、公認会計士資格取得を真剣に考え始め、公認会計士として実際に仕事をしている先輩女性に話を伺いに行きました。

待ち合わせの喫茶店に、カルティエのビジネスバッグを重たそうに持った可愛い華奢なひとが来られ、優しい声で「初めまして」というと、かばんからお揃いのカルティエの名刺入れを取り出し、名刺をくださいました。ちょうど高級ブランドの名前を覚え始めていた頃でしたから、ブランドをさりげなく使いこなす彼女のしぐさを観察しながら、私は、公認会計士になればこんな素敵なキャリアウーマンになれるのではないか、という思いにかられて、公認会計士受験の決意を固めていました。

公認会計士になるや、名刺入れを買いに走ったのは言うまでもありません。

「やらずに後悔よりも、やって後悔」の方が自分の性に合っている

こうして私は、20代の若さですでに二度も仕事における大きな方向転換をしてしまったのですが、その後も公認会計士として5年間お世話になったアーサー・アンダーセンを離れ、ベンチャーキャピタルを経て、経営コンサルティング会社に転職することになりました。

公認会計士の仕事は、大変やりがいがあり、自分が着実に成長しているという充実感も大きかったのですが、縁あって、何人かの著名な経営コンサルタントの仕事ぶりに触れる機会を持ったことをきっかけに、「コンサルティング」という仕事に引き付けられてしまい、未知の領域に飛び込む決断をしました。

いろいろな迷いや疑問が浮かんでいましたが、それでも前に踏み出してしまうのは、いつもどこかで「一度しかない人生なんだし、やって後悔するほうがやらないで後悔するよりもよいのではないか」という気持ちがあるからのようです。この時も、あれこれ考えた挙句、仕事で〝ダメ出し〟されたからといって自分の人間性を否定されたと思う必要はなく、向いてない仕事であれば、もっと自分に向いている仕事をそこからまた探せばよいのではないか、と思うにいたりました。

勢いよく飛び込んだコンサルティングの世界でしたが、仕事についてみると、これが想像以上に大変でした。コンサルティングの仕事に用いられる論理的思考法や問題解決手法、経営学のさまざまな理論、組織に関する知見など、知らないことが大半で、しかも仕事をしていくにあたってはこれらの領域の知識をうまく組み合わせながら進める必要が出てくるのでまさに手も足も出ない状態でした。

抜け出せずにもがく日々が延々と続きましたが、いつの間にか少しずつ仕事のペースをつかむことができるようになったころ、初めの1年で持っていた苦しい気持ちは和らいでいき、困難な状況をもっと前向きに受け止めることができるようになっていました。

その後、大学で教鞭をとったり、ベンチャー企業の育成支援を行ったり、といった新しい分野での仕事もさせていただくようになりましたが、現在も経営コンサルティングの仕事は、自分にとっての軸であり、あの時に思いきってコンサルタントを目指すキャリアに挑戦してよかったと思います。

時々の閃きに従って進んできたが芯の部分は常に「公認会計士」

大学の学生や後輩にはよく「どのような戦略を描いて今のキャリアを形成

したのか」というご質問をいただくのですが、実際の私の仕事の選択の仕方には戦略性も計画性もなく、その時その時、自分が見知ったり、閃いたりしたことに基づいて自分の目線で判断し、怖いもの知らずに突き進んできてしまった、というほうが正しいように思います。

しかし、私が自分の蓄積してきた経験の中で最も大事にしているのが公認会計士としてのキャリアです。公認会計士の勉強で培ったビジネスの基礎知識や、実務を通して体得したビジネス感覚はいろいろな局面で助けてくれており、一つの専門性を突き詰めた経験が自分の心の大きな支えになるといった面もあります。

女性の社会進出はずいぶん進んできていると言われますし、男性と伍して仕事をしていくというのも一つの選択肢だと思います。しかし、私は、むしろ女性であることの特性を活かした働き方は出来ないものか、と常に、考えてきました。

男性にとっては一つの職場で勤め上げることが一つのロール・モデルなのかもしれない、だったら私は仕事を変える自由度を持ってもよいのではないか。男性にとっては、短期決戦で勝負に勝つことが重要かもしれない、だったら私は瞬発力でなく持久力で頑張ろう…といった具合に女性らしさで差別化できるところを探してきました。

男性でないことを焦ったり嘆いたりするよりは、女性であることを誇りに

思い、楽しんで過ごしたい、という思いが強く仕事観にも出ているのかもしれません。

私の好きな言葉に、ココ・シャネルの言った〝In order to be irreplaceable, one must always be different（もし、かけがえのない人間になりたいのなら、いつも人と違っていなくてはダメ）〟という名言があります。

人と違うことをする、というのは確かに勇気のいることです。でも、自分の心の中に芽生えた閃き、感性や小さな意欲を無理に抑え込まず、正しいかもしれない、と思ってやってみることで何かが拓けてくることがあります。

いろいろな事情でそれが失敗することもあるかもしれませんが、その時は、失敗原因を出来るだけ客観的に分析してみて次につなげていく。そうすれば徐々に自分に合った道が見つかってくるのではないかと思っています。

著書やセミナーでのご活躍のみならず、経営者として多くの事務所を展開される根岸さん。一人の先輩として、実に貴重なお話を書いていただきました。

根岸 良子

ねぎし よしこ
公認会計士・税理士
中央綜合税理士法人・株式会社中央綜合ビジネスコンサルティング代表

Profile 75年 大学卒業後、上場企業海外事業部、中堅企業社長秘書／79年 アーンスト・アンド・ウイニー（現新日本有限責任監査法人）に入所、監査部３年、税務部２年経験後／84年 公認会計士3次試験合格／03年 独立、中央綜合税理士法人設立代表就任／04年 株式会社中央綜合ビジネスコンサルティングを設立代表就任

何の欲も野望もなく、めぐり合わせの縁のお蔭かと。

独立したら、どんな事務所にしようか、という具体的な目標があったわけではありません。外資系監査法人を退職したあと、元クライアントのヴァイス・プレジデントから連絡があり、日本に子会社をつくることになったので、財務部門の立ち上げを手伝ってもらえないか、というお誘いを受けました。私は独立することを決めていたので、パートタイムでもよければ、という条件で、アカウンティング・マネジャーを兼務することになりました。外資系企業から毎月50万円程度のパート収入を得ながら、自分の事務所の新規顧客開拓もできたので、恵まれた出発でした。

ある日、自宅マンションで仕事をしていると、証券会社の営業マンが訪ねて来ました。私は、わずかばかりの退職金を、この人に託すことにしました。それからしばらくすると、その彼は本店営業部長を連れてきました。

営業部長さんは来るやいなや、「わが社で、節税商品を出すので、顧客向けセミナー講師をやってみる気はないか！」とおっしゃるのです。「うれしいお話ですが、私、セミナー講師なんてしたことないので…」と言いますと、「それならわが社の本店営業部で予行演習させてあげるから」というわけで、と

うとう私は、その証券会社のセミナー講師になってしまいました。

何度かセミナー講師を務めた頃、営業部長さんは「君と同じように、今独立したばかりの公認会計士がいるから今度紹介するよ、場合によったら一緒に仕事をしたらいいじゃないか」と言われ、その先輩会計士先生とシェアハウスならぬシェアオフィス的なコラボレーションをすることになりました。

先輩の代打で執筆し印税でマンションが買えた!?

その先輩先生いわく、「根岸さん、これからは事業承継[※1]ですよ！」

「え～!? 何それ？ 何のこっちゃわからん！」

「中小企業をよく見てごらんなさい。どこの会社にだって顧問税理士さんがいるじゃないの。そんなところへ出かけっていって顧問にしてください、と言ったって、どこが相手にしてくれる？ でも事業承継ならチャンスはありますよ。会社法・民法・法人税法・所得税法そして相続税法がわかってなければできないんだから！ やり方を教えてあげるから一緒にやりましょう」

というわけで、私は事業承継という未知の世界へ突入することになったのです。

先輩会計士先生は、すでにFP（Financial Planning）の世界では売れっ子

※1：事業承継／事業承継とは、会社（事業）を現在の経営者から、他の人（後継者）に引き継ぐ形で譲渡することを指す。

になっていました。日本一のザ・生保で毎日のように講演し、1回の講演で数十万円稼いでいました。あまりに忙しくて、ある出版社から来た執筆の仕事を、「根岸さん、僕、忙しくてできないから、書いてみない？」と仕事を私に投げたのでした。売れっ子先生の代わりに原稿を書いたところ、私の原稿が出版社の社長さんの目に留まり、「今度FPの本を出版するので、あなたに全部書いてもらいたい！」という依頼が来ました。

私自身は、何の欲も野望もなく、人とのめぐり合わせのご縁を深く考えもせずに受け入れ、来た仕事をひたすらこなしただけなのですが、わらしべ長者（長者というにはお金はないけれど）のように、夢の世界へ邁進していきました。

そのうち、書いた書籍は金融界のベストセラーになり、「蔵が建つ」は大げさにしても、小さなマンションを買えるくらいの印税をいただきました。世はバブル真っ盛り、講師の仕事や執筆の仕事が次から次へと舞い込み、日本中をドサ廻りしているうちに、バブル崩壊。司令塔がなく、ただただ仕事に流されていた私は、気がつけばただの公認会計士に逆戻りしていたのです。

「農耕型」「狩猟型」の2つをバランスよく確保する重要さ

われわれの業界には農耕型と狩猟型の仕事があります。顧問先をもって、

【根岸ノート】

□ キャリアアドバイス

・公認会計士という仕事が、ビジネスの基盤を担う仕事であるということ

・公認会計士の仕事をすることを最終目標としてもいいし、ひとつ経過点として、別の道にチャレンジしてもいい

・どんな道を目指すにしても、役に立つ職

決算指導や税務申告、各種相談業務を行い、毎月きまった報酬を受領するのが農耕型、コンサルティング、事業再生、M&A業務等をスポットで受けて比較的大きな報酬を受領するのが狩猟型。農耕型と狩猟型の仕事を、バランスよく行うことではじめて事務所経営は安定成長します。

「アリとキリギリス」におけるアリのように、こつこつと働いて定期収入を確保する農耕型の仕事を持たないことが、いかに不安定で惨めであるかを思い知らされました。そこで提案型ビジネスで新規顧問先を開拓しなければと思うようになりました。時代が求めるニーズを考え、そのニーズを金融機関向けのプレゼンテーションに落とし込み、金融機関から顧問先を紹介していただく、という営業スタイルを考えました。

当初、事業承継から始まった提案は、その出口戦略としてのM&Aや組織再編、事業再生等の仕事にまで広がっています。

この先、次世代に上手くバトンタッチできるよう…

ブラックマンデーによるバブル崩壊、リーマンショックによるバブル崩壊と、この20年で2度のバブル崩壊を経験しました。さらにアジアの新興国が背後に迫ってくる中で、我々の業界も厳しい時代を迎えつつあります。

業

・欲を言えば、公認会計士プラスαをもつといい。プラスαは、外国語であったり、ITであったり…

□ なぜ公認会計士の資格を?

私が青山学院大学の経営学部を卒業したのは昭和50年（1975）で、上場メーカーに入社しました。配属は海外事業部。LCの管理から役員会の資料づくり、社内報の作成、お茶くみ、コピー取り…。こんなことを長いこと続けて、将来はどうなるのかしら、と入社2カ月後には思うようになりました。

次に、貿易の仕事で身を立てたいと思い、電子部品製造業の会社へ転職。会社はアメリカの企業と合弁事業を始めることになりましたが、社内で英語ができるのは数名しかおらず、社長秘書も兼任しつつ合弁会社設立に向けて連絡係をすることになりました。これが私の人生を変えるきっかけになったのです。

その時に初めて、国際的に活躍する弁護士や公認会計士がいることを知りました。国際法律事務所にはちょくちょく

気がつけば、わが社も東京を中心に、盛岡・仙台・京都に事務所を構え、50人を擁する中規模事務所になりました。20数年前に、監査業界に合併の嵐が吹き荒れたように、独立系会計事務所が、今まさに合併の嵐の中に突入しようとしています。おそらく我々の事務所も、その嵐を避けて通ることはできないでしょう。

ここまで成長したわが社を、いずれは次の世代の人たちに、委ねたいと思います。次の世代の人たちは、より困難な道に直面することになるかもしれませんが、それに打ち克つことのできる人材に、きっとめぐり合えると思っています。

通ったのですが、あまりのかっこよさに、口をあんぐりと開けて「あんなふうになりたい、あんなかっこいい事務所で働きたい！」と思ってしまったのです。思いこんだらやめられない。合弁が成就するのを見届け、お世話になった会社を退職。いろいろと迷った末に、公認会計士試験にチャレンジすることにしました。理由はただ一つ。司法試験よりは早く受かりそうだから。2年半OLをしたので、受験勉強に何年もかける時間的余裕がなかったのです。

運よく、1年ちょっとの勉強期間を経て2次試験に合格。あこがれの外資系監査法人へ入ることができました。監査法人では外資系のメーカー、商社、金融機関等を担当し、3年経過する頃には先輩と結婚しました。その後長男を授かり税務部へ移籍し、2年間勤務した後に独立開業しました。

ちょうど監査法人に合併の嵐が吹いていた頃。そこに残って階段を一つひとつ登っていくという方法もあったのかもしれませんが、新しい境地に飛び込んで自由にやってみたい、と思ったのです。

ちょっとお茶の時間

その２～公認会計士にはドレスコードがあるか？

女性公認会計士は実際、
毎日どんな格好で業務に励むのだろうか？
あのドラマみたいに
「ビシッとしたスーツ」なのか。
まずは監査法人内部のお話から…

●サマーカジュアル（ノーネクタイ、上着なし）が認められていますが、**男性のシャツはパンツの中に入れる**ことになっています。**女性の生足やミュールも禁止。**髪の色は金髪とかはさすがにだめですが、少し茶色くらいはＯＫだと思います。（40代／監査法人パートナー）

あとは、「監査を担当する相手先によって、
服装が結構変わる」というのが
この業界では普通のようで…

●**「銀行ならきっちりと、学校だとまぁ少しくらいユルくても許されるでしょう」のような感じ。**（20代／監査法人勤務）

●クールビズも基本的にはクライアントの設定した期間に合わせるのですが、たまに期間がずれているクライアントがあって、**「今日の往査先はもう上着着ていかなアカンかったかな」と迷う**ことがある。（30代／監査法人マネジャー）

●**最も服装派手めでも◎なのは、アパレル**かな。もちろん、**ＩＴ企業は自由度高い**から訪問は楽です。（40代／会計事務所経営）

●ゆるかったのはアミューズメント業です。**デニムも可でビジネスカジュアルというより「カジュアル」でした。**（30代／監査法人マネジャー）

そして年齢や地位が上がるにつれて
服装も変わっていくのは、
どこの社会でも一緒。

●若いうちはあまり目立たないように地味な色のスーツを着た。オバサンになりちょっと地位がついてきて図々しくなったり、相手の経理の人の年齢が自分より若くなってきたりしたら、こっちも派手な色目の格好をしていった。マネジャーになり社長ディスカッション・報告会のときは、オジサンたちの目を意識してスカートスーツを着ていった。**オジサンって、スカートの方がフォーマルと思う**年代なんですよね。（40代／会計事務所経営）

スーツのバリエーションも
キャリアと共に増えるという訳です。
ちなみに彼女は、新幹線移動の際は必ず
パンツスーツだそうで、そのココロは
「けっこう風邪ひくのと、人目を気にせず
足を投げ出して爆睡するために」だそうで。
日本経済を支えるタフな皆さまです。

じょせいかいけいしにじゅうにん　じんせい　ちゅうかんけっさんしょ
女性会計士20人　人生の中間決算書

2011年2月25日　第1刷発行

編者　日本公認会計士協会近畿会　女性会計士委員会
発行人　小川泰彦
発行所　日本公認会計士協会近畿会
〒541-0056 大阪市中央区久太郎町2-4-11 クラボウアネックスビル2F
電話：06-6271-0400　FAX：06-6271-0415
https://www.jicpa-knk.ne.jp
kinkikai@jicpa-knk.ne.jp
発売所　株式会社 清文社
〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北2-6 大和南森町ビル
電話：06-6135-4050　FAX：06-6135-4059
〒101-0047 東京都千代田区内神田1-6-6 MIFビル
電話：03-6273-7946　FAX：03-3518-0299
http://www.skattsei.co.jp

女性会計士委員会では主に以下の活動を行っております。
1．異業種女性団体との交流に関する事項
2．働く女性問題の研究に関する事項
3．外国における女性会計士の実態の調査研究に関する事項

編集メンバー
会長　小川泰彦
担当副会長　高濱 滋
委員長　宮口亜希・栗原貴子（前委員長）
副委員長　堤あづさ・岡本善英
委員　伊加井真弓・玉置寿子・北山久恵・林紀美代・種田ゆみこ・俣野朋子・南里美・吉川和美・谷村尚子・池田緑・播磨宏美・野瀬裕子
サポーター　清水敬輔
監修　日本公認会計士協会
編集協力　株式会社140B
装幀　疋田彩子（Style Inc.）
イラスト　ハンジリョオ
印刷・製本　図書印刷株式会社

©The Japanese Institute of Certified Public Accountants KINKI Chapter 2011, Printed in Japan
ISBN978-4-433-48100-1

乱丁・落丁本はご面倒ですが、発行所負担にてお取り替えいたします。
この本についてのお問い合わせは日本公認会計士協会近畿会あてにお願いいたします。
本書の無断複写複製（コピー）は著作権法上の例外を除き禁じられています。
定価はカバーに表示してあります。

『女性会計士２０人　人生の中間決算書』（下）
http://p.booklog.jp/book/73243

著者：kaikeishi

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kaikeishi/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/73243

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/73243

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ